

婦人問題研究

第20号	* 山岸会における住居觀
1973年9月20日	* がんばらない世代 * 「婦人問題研究特別号」を読んで 橋本綾子 * アンケート中間報告
町田玲子 清野博子 編集部	

第三七回例会（一九七三・七・二八）

山岸会における住居觀

—山岸会・春日山における生活—

町田玲子

山岸会とは、ヤマギシズム思想（人間変革を基礎にした理想社会建設の考え方）に共鳴する人々によって結成されており、ヤマギシズム社会化運動を主体としている。ヤマギシズム思想の創始者である故山岸巳代蔵が養鶏法にこの思想を応用したため、山岸会を養鶏の会とする見方もあるが、養鶏は生活の手段にすぎない。

山岸会の本拠地である三重県伊賀町の春日山では、山岸会の趣旨を実現にするために、いくつかの機関がおかれている。すなわち春日山居住者の家庭にあるヤマギシズム生活中央調整機関、仕事の場であるヤマギシズム世界実験中央試験場、山岸会構成員としてふさわしい人になるべく、自らのあり方を変革し、深めていく場であるヤマギシズム研鑽学校、およびヤマギシズム出版社、山岸会本部などである。春日山で、生活・生産活動などの試験を行い、確実な点を各地の生活実験地がとり入れていくしくみになっている。

以下、春日山での生活実態についてのべてゆきたい。敷地は約5万坪で、先に述べた各機関が点在し、それらの間に居住者の宿舎（すま）がある。宿舎は夫婦達と小学生以上の子供達とは全く別になつて

いる。

生活の運営は運営委員会が行い、その決定・執行は、執行部総務が行う。運営委員は、全参画者を十のグループに分けて作っている「仲よし班」の各班代表者である。また運営委員によって、参画者全員の中から執行部の人事科と経理科の計六人が選ばれることになっている。生活運営上の各部門には数名ずつの係がおかれている。係には炊事、洗たく、幼児、学育、更生、物品供給、理容・美容などがある。健康相談、結婚に関することなどは人事の係が行っている。自給食料は調達係が準備する。これら運営委員、執行部、各種係などは六ヶ月毎に自動解任となる。配置の決定は各人の意志を尊重しながら人事係が行う。仕事は各自の能力、持ち味に応じて行うため負担に感することはなく、むしろ楽しみに通じるという。

ヤマギシズムの考え方により無所有・共用が実践されており、仕事は無報酬である。現金は一切持たず、必要な物品は物品供給係を通じて手に入れる。物事の決定は研鑽によつて行われる。研鑽には定期的なものと不定期なものとある。

子供達のうち小学生一年から高校生までは学育係の世話をもとで生生活している。週末には「家庭研鑽」を行うために親もとで一泊していく。五才以下の乳幼児は乳幼児係が世話をしている。朝七時頃から夕方六、七時頃まで幼児舎で生活し、その後は両親と一緒にすごす。子

供が病気になり看病を要する場合は、原則として親元に返される。

夫婦は多くの場合同じ仕事を分担している。夫婦間には経済的なつながりがなく、子供に対しても二人だけの子供という所有観念を持たず、男女間の純粹な愛情で結ばれていることになるという。

主婦は家事労働から完全に解放されることが出来る。しかし炊事、

洗たくなど個人的に処理したければ、それも可能である。山岸会では食事は午前十一時頃と午後五時頃の二回であるが、子供達のためには朝食と弁当の用意をしなければならず、「婦人研鑽」の中で毎朝の当番が決められる。山岸会の中では係（仕事）に性別の差がなく、各係内にはリーダーの立場の人もなく、全く平等であることが原則であるが、「男女生れながらにして適性がある」として、炊事、洗たくなどの係には女性がなっている場合が多い。しかしこの点については、彼女達自身に自負心のようなものがあり、係を任せることが喜びにながっていいるように見受けられた。

春日山の居住者の生活は野菜・肉・卵類は自給で、その他の食料および衣類等の生活必需品は外部からまとめて購入している。現在で一人あたり一ヶ月の基本的な生活費は一万円足らずであるという。この生活費は養鶏、養豚、建設、ビニール袋作製の請負仕事などの収入によっている。

生活水準はとくに住生活面において低く、要求の声も多いそうであるが、運動を展開する中で徐々に改良していきたいと居住者の表情は明るい。

以上のような一体生活を送っているが、現法制に即しての生活であり、社会義務にはすべて参加している。無所有・共用の考え方方が根底にあるにも拘わらず、現実の生活の中では徹底出来ていない点で擬問

に思いがちであるが、現実の所有社会と断ち切ってしまわずに関連性を持ちながら、一体化をおし進めていく点は、単なるユートピアとは異なる所であろう。

討論

報告は職業と、どうしようもなくおかいがぶさつてくる家事、育児をどう両立させればよいかという、女性にとって陳腐であるが常に新しい問題に迫るため、生活共同化の一つの事例としてヤマギシ会の紹介を行ったものである。紹介はヤマギシズムと、それにのっとった共同生活を衣食住・仕事の分担・精神生活等の全般にわたり、報告者が自ら撮影したスライド映写をまじえて行われた。

討論は生活共同化をめぐる問題よりはむしろ、「ヤマギシ会ってどんなものだろう」という事に 관심が集中し、報告者にヤマギシ会についてのより詳しい紹介を求めることがとなり、はからずも報告者にヤマギシ会を代弁して答えてもらう事になった。

従つて討論のまとめは当日の質疑のやゝ関連性のうすい事柄の羅列とならざるを得まい。

○ヤマギシ会は養鶏・養豚を基本的な仕事にしているが重工業をどうみているか、又会員の子弟の職業選択の自由はあるか。

ヤマギシズムではどんなに産業の形態が変つても第一次産業、農業、牧畜は不可欠のものであり、これこそ自然の生成過程にそった営みであつて人間がそれにたずさわる事に特別の意味を見出している。だが

近年、ヤマギシズムの養鶏・養豚も、周囲の機械化の趨勢にあって、旧来の方法では立ちゆかなくなり機械化を迫まられている。しかし機械が導入されると、直接に自然の生成過程に参画するという思想に変

容をせまられるのではないか。

又ヤマギシズムでは以上の様に第一次産業を基本としているものゝ、会員の子弟の職業選択の自由はある。従って学校教育をおえ、ヤマギシ会以外に職業を求めるものもあるものゝ多くの子弟はやはり親達にならい、会にとゞまるものが多い様である。

○現今の社会への関わり方はどうか、ヤマギシズムを周囲に普及させるためにどの様な事が行われているか

ヤマギシズムの発端は第二次大戦後の戦争批判を契機としており、現実の社会については私有財産制、能力主義等に対して強い批判をもつ。従って無所有公用、つまりもたなくとも使えればよいというのがその共同生活を支える理念である。そしてヤマギシズムは「研鑽」によるその思想への共鳴と共同生活によりそれを実践することにより実現される。普及の形態としては現在は北海道、九州を始め全国二十数カ所ある実験場をふやしていく事である。従って養鶏・養豚による収入は消費生活にまわされるのではなく、生活をきりつめても蓄積してヤマギシズムの普及に使われる。たゞその際にヤマギシ会では共同生活の規模は大きくならない事が必須条件で、人々が肌を許し合うというパーソナルな関係を保持出来る範囲でなければならない。従って全国各地に無所有共同の理念に立つ小共同体をいくつもいくつも増やす事を意図している。だが、このようなヤマギシ会の理念は「日本列島改造論」等で土地の買い占めが進行し地価の暴騰といった現状にあって、広大な原野で第一次産業を中心とした共同生活を実現するという牧歌的な夢がいつまで続くものか。

○仕事の分担制度はどうなっているか。女性の仕事上での地位は。

理係・学育保育係等々の共同生活をさゝえるすべての仕事に、全員が

交代である事になつており、半年毎に分担が変更される。分担を定めるルールは各人が希望を申し出て「研鑽」により互選する。しかし紹介された事例では育児、炊事といった仕事に女性があたる事例が多く、ヤマギシ会では各人の適性に従うというが、農村の保守的な体质をそのまま残してはいられないだろうか。

○男女関係、結婚生活、親子関係はどうか。

一夫一婦制は自づとまもられ、共同生活にあってもそれがくずれることはない。子供への感情はやはり「我子」という普通の関係であり、親と子の感情の交流も特に變った点はない。会員相互の若い男女の恋愛はあり、研鑽の場で夫婦としてふさわしいと認められゝば結婚に踏み切る。だがお互に恋愛感情はあつたとしても研鑽の場で、ふさわしいと認められない場合には、その恋愛感情は本当のものではなかつた――
と思ひ込ませる。

以上、テープからひろった当日の質疑のまとめであるが、紙幅の関係より割愛せざるを得ないものも多く、当然の事として筆者の関心により歪曲されてしまったこと、おことわりしたい。（於婦人センター

出席者二〇名宮城公子記）

がんばらない世代

清野博子

最近、ひとりの女子大学生に出合った。関西のある有名私立大学二回生。ウーマンリブ運動に共鳴し昨年の暮れから、新宿のリブ合宿に参加したまま、大学に顔を出さない。学業を続けるつもりかどうか、という大学側の再三の呼び出しに応じて、やっと舞い戻って来たところを、偶然、取材に行っていた助教授の研究室で会い、紹介されたのである。おかげで頭、化粧、気のない浅黒い顔。丸い眼鏡をかけた、どこにでもいるような平凡な女の子。「マスコミはうそを書くから嫌い」といいつつ、リブ特有の言葉使いで機関銃のようにまくし立てる。その威勢の良さに、いささかあきれながら聞いていると、突然、彼女は肩を落とし、気弱な表情を見せていふのである。「でも私、本当はいま、何をしたらいいのかわからないの」。

「どうして?」とびっくりして問い合わせた私は、彼女は、今度はとつとつと語った。女性解放の問題に关心を持ったのは、高校生の終わり、将来、あたりまえの結婚をして、あたりまえの幸せをつかむように育てる母親や周囲の抑圧に耐えられなくなつて、とにかく、経済的に独立しさえすれば解放されると思い、家を飛び出し、アルバイトをしながら自活を始めた。

しかし、職場で思い知られたのは、女は安く、使い捨てにされる労働力でしかないこと、それなのに先輩の女子社員のほとんどは、何の疑いも怒りも感じず、ひたすら結婚を夢みて、しのぎをけずつている。美しく、有能な女性ほど、同僚や取り引き先の男子社員の結婚相手として早く売れていく。社内では、「女らしさ」という、ひとつの

梓組によつて、結婚の対象になる女子社員と、ならない女子社員がみごとにあるいは分けられ、細かい序列がつけられている。職場に花を生けたり、お茶を入れたりすることですら、「女らしさ」を強調するデモンストレーションの場として利用されている。一 定職を持つことが解放につながるということが、幻想でしかなかったことを思い知られたわけである。

結婚ってそんなにすばらしいことかと思って、「男と一緒に暮してみたわ、でも、ひと月くらいであきちゃった」。

「作られた女」から「あるがままの女」へ、リブの主張どおり、女らしさを否定し、結婚を否定し、子供を産むことを否定し、男女差別に甘んじて職場で働くことを否定し……すべてを切り捨て、整理してみたら、結局、何をして生きたら良いのか、わからなくなつたというのである。

私は、答えるすべがなかつた。学校に戻れといつても、マスプロ教育のいまの大学に、彼女の心の空白を埋めるものはない。まして、大学卒という一片の肩書きなど、現在ではほとんど何の価値もない。仕事をみつけるにしても、それほど働きがいのある仕事があろうはずもない。一 私自身、索漠とした気分に襲われ、どうしようもないやり切れなさを抱きつつ、彼女と別れた。以来、彼女のことが、ひとつ的重要いしこりとなつて残つてゐる。

仕事の関係で、さまざまの年令、階層、職業の女性に会う。最近、特に感じるのは、「何をしたらいいのかわからない」あるいは「何もしたくない」若い人が意外に多いこと、たとえば、ある国立大学出身の若い同棲のカップル。二人とも定職を持たない。毎日何となくブラブラと暮している。お金がなくなれば、アルバイトをすれば二、三千

円は簡単に手にはいる。特別やりたいことも、やるべきこともない。

「私たちの世代って、先が見えているって感じで、すぐにしらけてしまう。何に対しても一生懸命になれない。彼と一緒に暮しているのは、ひとりじや寂しいからだけ」と、ひらきなおっている。

どうしてこうなのか、正直いって私にはよく理解できない。新聞社という男社会の中で、幼ない子供を二人も抱えて働き続けている私など、いつも“がんばらなければ”という意識に追いかけまわされている。“女だから”という弱味を見せたくない、“女だから”という偏見を持たせたくない、という熱い思いにいつもとらわれている。やりたいことも、やらねばならないことも山のようにあり、思うように出来ないことにあせりを感じている。しかし、そんなガンバリズムが後輩たちには通用しない。「先輩があんまりがんばるから、やりにくくて仕方がない。髪あり乱してがんばることは現代では決して美德じゃない。もっと優雅にやらなければ」と、猛反撃を受けてしまうのである。

私の先輩たちで、すぐれた仕事をし続けている人には独身が圧倒的に多い。女であること自ら拒否しなければ、働き続けられなかつた

世代である。それに対して私たちは、仕事か家庭かの二律背反にハムレット的に悩むのではなく、仕事も家庭もやってゆきたいという共働き世代。その条件も少しずつ整つて来ている。しかし、それが次の世代には断絶してしまうのじやないかという恐れを、最近、私は抱き始めている。四年制大学を卒業し、かなり専門的な仕事をし、実績をあげている女性でも、結婚あるいは出産と同時に、実際にこやかに、誇らしげにやめていく。つい最近も、ある自動車会社でかなり重要なポストについていた大卒の女性が「共働きしても、夫が家事、育児を手

伝ってくれないし、職場でも優遇されないから、女が損をするだけ。そんなしんどい目をするより、彼の収入で家にいた方が得だわ」と、事もなげにいってやめてしまった。

以前、何かの会合で、東大の中根千枝さんが「有能な女性がひとりかふたり出現しても何にもならない。ひとつの層、厚みとして存在しない限り、社会を変える力にならない」と語ったのを聞いたことがあります。私も、全くその通りだと思う。しかし、幻想としての豊かな社会の中で、がんばることを放棄した若い世代を思うとき、働き続けるべき論は、ひとつ危機にさしかかっているのじやないかと、暗澹たる気分におち入ってしまうのである。

「読んだ本」

西川祐子

秋山清著「自由おんな論争—高群逸枝のアナキスム」（思想の科学社）この本は橋本憲三編「高群逸枝全集」（理論社）が、逸枝が「婦人戦線」誌時代に山川菊枝らとかわした論争を多く脱落させていることを批判し、後の女性史研究の動機ともなる論争を紹介するために書かれた。

逸枝は「恋愛創生」の巻頭で女権主義にたいし自分の立場は女性主義だといつて。唐突にみえる分類だが論争紹介をよめば、これがアナ・ボル論争いろいろの逸枝の立場であることがわかる。論争のなかで逸枝は「母性は育児の社会化を欲しない。協同化を欲するのみだ」といった。職業的保母は不自然だという言葉のみをとると女は家庭へ、と同じになるが、これは逸枝の家庭論や権力というものの理解とあわせ読むべきものである。論争が昭和のはじめにかわされ、やがて子は国の大宝といふ別の社会化傾向がやってくることも考えると、論争の結

着だけではおわらない。女権主義は婦人運動の基本線だが、女性主義はその公式ラインの硬化をつく役をいつもにならうようだ。

女性問題は前の時代をくりかえす。しかしながらくりかえすのは無駄なことだとつくづく感じた。わたしは逸枝全集の愛読者が現在、高群逸枝雑誌を編集している橋本氏は批判にこたえるべきだと思う。そして次にはテキストそのものが出版されることをのぞむ。

婦人問題研究特別号』を読んで

橋本綾子

前略

婦人問題研究の特別号ありがたくいただきました。二年間在籍していて、結局一度も出席できず、家も甲子園ですし、子供もまだ小学生なので、遂に退会いたしましたが、それにも拘わらずお送りいただき、厚く御礼申し上げます。

さて退会する他はないと決心しましたとき、余程疲れていて消極的になつておりましたが、その後胃潰瘍で大出血の恐れありとかですぐさま入院し、ずっと三ヶ月余入院しています。今も病院で拝見しています。身体が少しずつよくなると、また積極的に考える余裕が出て参りますのでしょう。新鮮な感覚で拝見いたしました。臨時会員ということにしていただいているかと思いますが、ともかく退院いたしましたら、一度この目で例会を眺め、考えてみようと思いはじめています。(…ともかく、病気と共に後退しそうになつてゐる私をひきとめるものが、あの特別号にはあった、ということをお伝えしたいと存じました。(…)

池田氏と西川氏の論文を拝見いたしました。両者とも大変な力作で

私は沢山のことを教わりました。私自身も息子が今年から家庭科を習つてボタンをつけたり、雑布をぬつたりしているのが可笑しく、それはまた、母親が入院でもしますと忽ち助つてはいるのですが、池田氏の論文を読みながら余りにも眞面目で、余りにも一生懸命で、息がつまりそうな気がしました。(これは、私が病氣で根氣のないせいでもあります)そして、實に綿密に書かれた家庭科教育の実態が、それ程深く問題意識をもつて心にくいこんでこなかつたのは、この運動の烈しい時代に、「今、家庭とは一体何なのか」という問いかけが作者の姿勢の中で乏しかつたからではないだろうかという気がいたしました。

このことは「新設女子大」の問題でも同様で、女子大学の実態はよくわかり、また私も常に感じている所ではありますけれど、最後の方の結びの言葉として、「女子の特性の中に閉じこめられた立場を逆用し、現実への批判になり得るものと大胆な実験的教育を行うべきだ」という主張は一応納得できるのですが、しかし、女性だけではなく、人間そのものの未来さえ危ぶまれてゐるときに、そしてその人間観、理想像さえ混沌としている現代に、どうして同じ人間の、そして女性の理想的人間像や、或は、それに関連する教育觀に確なものがつかめるのだろうという気がします。そしてそれがつかめないままに女子大のるべき姿を探つたとしてもそれは不毛に終つてしまうのではないだろうか、と思いました。

女性はたしかに長いあいだ被害者であつて、私自身もまた、京都の古い家族制度の中で、女のくせに、と絶えず言われつけた娘の頃、女だてらにノと罵しられた大学時代、結婚後も、職場でも、唇をかまなかつた日はありません。だから、男性、女性という

考え方、つまり被害者意識には相当あきあきしてきていました。しかし近頃私は日本の社会に次々と起る恐ろしい事件を見るにつけ、加害者であった筈の男性は実は何らかからの被害者の塊ではなかろうかという気がし始めています。政治家をはじめ大企業や主として支配階級のあのエゴイズム、あののみみっちさ、あの残酷さ、あの無計画さ、無神経さ etc.。だから私は男性と区別された婦人問題研究、その存立はやむをえないものとして認めるものの、男だ、女だ、というよりも、

この危険の溢れる日本の社会の中に一体、何があるのか、ないのか、

そういう社会の中で、私の生んだ子供は、一体どのような教育をされねばならないのか、またされる可能性があるのかを根本的に問い合わせる必要があるのでないか、と思われてならないのです。平塚雷鳥にしても伊藤野枝にしても各々の置かれた歴史的時点において最大に闘い燃焼したと思われます。しかしそれから戦争を挟んで啞然とする位に変った現代、余りに複雑な問題をはらむ現代において婦人問題は或る意味では発想の転換、或る意味では根本からの問い直しの時期にきているのではないかと思われてなりません。

それには余りにも生真面目な息苦しいほどの公式的論理や、経験に基づいた井戸端会議的な話合いと不満の解消、或いは過去の婦人運動家の解釈や意味づけだけではなく、その何れも、それはそれなりに各々の時点での役割を果したとは思うのですが、それよりも今は、人間の認識をふまえた魅力ある論理が生れてもよさそうに思われるのです。覓氏の言われるよう、私もまた、ホーチミンの時代以後の北ベトナムの女性たちに強い関心をもっていました。あの小さな、持たざる、死に面した国の女性たち、肩をはらない、しなやかな、そして驚ろく

凡そ無縁のものであります。そしてそれは誰がどうしたというよりも、現実をひたとみすえ、その中で可能性を見出し、それに向ってひたむきに生きる所から生れたものと思われます。この辺から、婦人問題研究会、いや私達は学ぶべきものがあるのではないだろうかと思われてなりません。魅力ある婦人問題研究会。私はベッドの上で少しずつ考えてみたいと思っています。私自身の女の生き方と共に。(…)

一省略責任編集部一

一九七三年六月六日
婦人問題研究会御中

橋本綾子

アンケート中間報告

特別号に付したアンケートの回答は七月現在では、まだ葉書十四、手紙二しか戻っていません。そのうちで一番長く熱心な感想を書いて下さった橋本さんの手紙を筆者のご了承をえて掲載しました。残りの一葉書の到着をまちながら、いただいた回答をまとめます。

① ごらんになつての感想

*充実している *参考になつた *ヴァラエティに富み面白かった *本の大きさ、表紙もいい *個々の文章についての言及として一看護婦への道、内側からの眼、熱い落日、女子大から、に興味をもつた。

批判 *婦問研の全体のイメージが出てこないのは残念、もっと全体的な反映を可能にする編集のしかたはなかつたか。

アンケートには個々の文章について感想を求めるスペースがありませんでした。十一月の合評会にはぜひ意見をおよせ下さい。

② 今後どんな編集がよろしいか

*全体の意見が反映しない欠点の克服 *いろいろな分野の問題をとほどの強調さとやさしさを備えた同性たち。これは被害者意識からはりあげられたし、△体験から△の看護婦の実態よくわかつた *婦人論、

婦人論争史などとりあげる * 一つのテーマを各方面からみる特集号的なものにする（同意見多數） * 紙など悪くともたびたび出す、季刊の定期刊行物にする。

③執筆について

* その意志はないーナシ * 今はダメだが将来は書いてもいいー十二名 * 書いてもいいー一名 テーマは「文学にあらわれた女の意識の問題」 * この項回答なしー二名

④原則として二ヶ月に一ぺんお送りしている会報について御意見、御感想をどうぞ。

* 例会に参加できずにいるが、会の様子がわかつてよい * 例会欠席がちな者としては資料など入れてもらえるとよい * 前回の会報にたいする意見や批判が例会欠席者からも出て次号に載るようにするといい * 例会出席者が固定されているようだが、第四土曜が都合のつかない人もいる * 会員の近況をいれる * かるい「よみもの」がもう少しあつてもよい * 報告者の生の主観があつてもよい * 楽しみにしているが自分の興味ある部分のみ読了している * 三または四ヶ月一度 * （意見はアンケートのスペースに）書き切れません。

なかなかあわただしいです。八月は例会が休みなので、その紙面をつかって、自由原稿の執筆をお願いしました。

続ける意義のある会誌にするために、ぜひ投稿してください。四百字詰原稿用紙約三枚が一頁分で載せやすいですが、それ以上でも結構です。また四百字分くらいの空きもよく残ります。「読んだ本」、「こんな話」その他コラム欄の名前も考えて、葉書で結構ですから事務局へお送り下さい。

△お知らせ△

例会 九月二二日 福祉労働者と職業病について

一〇月二〇日 ソヴェトの医療制度について

一一月 家庭科教育について

一二月 「婦人問題研究特別号」合評会

△お願い△

会費未納の方が多くて印刷費および会場費など運営に苦労しています。どうかよろしくお願いします。

編集部

一九七三年九月二十日 印刷発行
「婦人問題研究」第二十号

発行者 京都市左京区下鴨半木町 京都府立大学寿岳研究室内

特別号については、葉書の返送と合評会出席をおねがいします。次の特別号編集についての意見も出して下さい。

会報については、まず例会記録の役割をはたすため、編集部は定期刊行につとめたいと思います。そうすれば討論への後追い参加、紙上参加も可能になるでしょう。しかし第二月の例会の一週間後には原稿をそろえないと次の例会までに会報を刷り上げることができないので、